

シンポジウム

2022年7月2日(土)

昨年の総会シンポジウムは「東日本大震災と協同組合」をテーマに開催しましたが、この中で示唆されたのは、地域における協同組合が孤立して活動するのではなく、多様な主体とかかわりあうことの重要性でした。コロナ禍に留まらず、今年もいくつもの自然災害が相次ぎ、また国内では少子化が急速に進むなど、改めて持続可能な地域を模索する必要性が高まっています。

こうした問題意識に基づいて、2022年度は「協同のネットワークを地域でどう創るか」をテーマにシンポジウムを開催いたしました。

シンポジウムは3部に分かれ、第1部では大高研道先生(明治大学)に「協同労働の今日的意味と可能性—地域づくりの深化に向けて—」と題して、労働者協同組合法を素材に、協同労働という概念と地域の協同のネットワークについて、基調講演をいただきました。第2部では大高講演を受けて、地域における協同のネットワークを、協同労働や労働者協同組合という枠組みを活かして、どのように作っていくかを具体的に考えるため、京都北部地域から2つの実践例をご報告いただきました。上村敏雄氏(企業組合労協センター但馬地域福祉事業所)からは「若者サポート、森づくりの取り組み—但馬地域における実践—」というテーマで、就労や引きこもりの支援等の多彩な活動を展開する若者サポートステーションについてご報告いただきました。次いで古村信宏氏(日本労働者協同組合連合会理事長)からは「地域のネットワークづくりにどう取り組むか—京丹後地域の実践を中心に—」として、京丹後市における行政とも連携したコミュニティづくりについてお話いただきました。最後の第3部では、青木美紗先生(奈良女子大学)をコーディネーターに迎え、3名の登壇者およびコメンテーターとして細川孝先生(龍谷大学)と東田一馬氏(京丹後市大宮地区つねよし百貨店代表)にもご登壇いただきました。コメンテーターからは、それぞれの視点から各報告についてご意見をいただき、その上で全体でのディスカッションを行いました。

それぞれの詳細は本誌紙面に確認いただければと思いますが、労働者協同組合という組織のあり方を一つのヒントにして、協同労働という文化や考え方、働き方のあり方を広げていくことが必要だという議論は、大変興味深かつテーマにとっても重要なものだったと思います。

この10月から、いよいよ労働者協同組合法が施行されます。それ自体は喜ばしく、協同のあり方の新しい具体例となることでしょう。しかし、労働者協同組合も、地域生協や他の協同組合同様に、それ自体はあくまでも入れ物・枠組みです。その中身を充実させ、また理念に沿った内実にしていけるかどうかは、これまでと変わることなく、現場や地域での日々の実践にかかっています。本誌にまとめられたシンポジウムの内容が、そうした実践の励みやヒントになり、労働者協同組合や協同労働の発展という流れに掉さすものとなれば幸いです。(『くらしと協同』編集長 加賀美太記)